加入国際学術団体に関する調査票

1　国際学術団体活動状況（内規第 11 条　活動報告）

団体名	和	海洋研究科学委員会
	英	Scientific Committee on Oceanic Research（略称　SCOR　）
	団体 HP（URL）	http://www.scor-int.org/ （日本学術会議が加盟していることの記載 (有) ・　無　）
国際学術団体における最近のトピックについて （学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等）		SCOR は、国際学術会議（ISC）の前身組織である国際学術連合会議（ICSU）により世界の海洋研究に関する初の学際学術組織として 1957 年に設立された。日本の海洋学研究者らはこの設立当初から積極的にその活動に関わってきており、設立時から 60 年を経た現在も ISC の加盟団体として基礎科学、工学や水産学など海洋に関わる幅広い分野を網羅し、これらの分野間連携の推進、分野横断的な問題解決を目指した活動を一貫して行っている。この分野間協力や統合的な研究の必要性という観点は現在進められている国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」や「持続可能な開発のための海洋科学の 10 年」の考え方と同じであり、SCOR においては 既に 60 年前から先取りして進められてきたものと言える。
当該国際学術団体の対応する分野の学術の進歩に貢献した事例		SCOR の活動は 1）ワーキンググループ（WG）の構築、2）1）の WG の発展形として国際共同研究プロジェクトへの発展、3）研究基盤の構築、4）人材育成、以上 4 つの柱を持つ。特に 1）を発展させた 2）の設立・運営を通じた海洋関連分野の発展に貢献してきた。現在活動中の大型国際プロジェクトの具体例を以下に列記する。Second International Indian Ocean Expedition（IIOE-2:第 2 回国際インド洋調査）、Integrated Marine Biogeochemistry and Ecosystem Research（IMBeR: 海洋生物地球化学と生態系の統合研究）、Surface Ocean-Lower Atmospheric Study（SOLAS:海洋大気間物質相互作用研究計画）、An International Study of the Marine Biogeochemical Cycles of Trace Elements and Their Isotopes（GEOTRACES: 海洋の微量元素・同位体による生物地球化学研究）、International Quiet Ocean Experiment（IQOE）。International Ocean Carbon Coordination Project（IOCCP:国際海洋炭素コーディネーション計画）等。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について		上記に示した SCOR 活動の 4 つの柱の 1 つ、1）WG の構築については、世界中から申請されてくる WG プロポーザルの中で最も成熟したプロポーザルを毎年 2–3 件採択し、3–4 年間研究費（主に会議を実施するための経費）を助成している。採択される「成熟した WG プロポーザル」のテーマは時流を意識した最先端かつ分野横断型の内容が多いが、3）研究基盤の構築に資する観測手法、分析手法、評価手法に関する国際規格を検討する内容や観測技術や分析機器等の研究基盤の開発に

	関わる内容もある。具体的には、上記でも取り上げた SCOR が支援してきた IOCCP は海洋炭素観測調査に関する世界的ネットワークの構築、分析法・分析技術の規格化、全球観測システムへのリンク等を行う国際プログラムである。また 4）人材育成に関わる点として、WG の構成員は分野のみならず、地域、世代、性差について多様な人材で構成されているかどうかが大変重要な観点となっており、満たさないプロポーザルは科学的内容が優れていても採択されることはなく、多様性の高い構成への改善を促して採択となる。また、Partnership for Observations of the Global Ocean (POGO:日本財団も支援)と連携して途上国研究者の国際会議への参加支援等を実施している。この多様性の高い構成員の考え方や途上国研究者支援は SDGs の「誰一人取り残さない」に共通する視点であるが、SCOR では既に 60 年前から先取りして導入されていた点を強調したい。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	SCOR の活動に対して日本の学術コミュニティは設立当初から積極的に関与し、これまでに SCOR 年次総会を 3 度日本で開催している（1970 年東京、2002 年札幌、2019 年富山）。執行部への日本人の貢献も高く、今まで 4 名の研究者が副議長を務めてきており、現在の副議長は富山大学の張勁先生が務めている（2018 年～）。また、上記でも紹介した国際インド洋調査（IIOE）の推進のために設立された 5 つの WG のうち 4 つに日本人研究者が関与しており、放射性物質の測定に関わる WG では三宅泰雄先生が議長となっていた。現在も複数の WG で日本人研究者が議長（現在は複数人による共同議長）として活躍している（筑波大学　青山道夫先生 WG147「海洋栄養塩測定比較実験と認証標準物質」、北海道大学　野村大樹先生 WG152「国際基準となる海氷下の生物地球化学観測方法の確立」）。WG147 は海水の栄養塩標準物質、WG152 は海氷下の観測手法の国際標準化を目指したもので、WG147 の成果物は、現在、海水の栄養塩濃度測定の標準物質として日本の企業から商品化され、世界の海洋観測研究者の利用も多く、海洋科学の進展に多大な貢献をしている。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて	SCORはISC傘下の海洋科学における唯一の学術団体であり、SCOR分科会は日本のナショナルフォーカルポイントとして位置付けられる。これによりISCにおける日本の海洋科学分野のプレゼンスを示すことが可能となっている。また、多くの日本人研究者が様々なSCORの国際共同研究やWG活動に参加することにより、日本学術会議傘下の各種学会（日本海洋学会、日本地質学会、土木学会、日本海水学会、日本気象学会、日本地球化学会、日本水産学会、水産海洋学会、日本プランクトン学会、日仏海洋学会、日本海洋政策学会など）の活動を通じて日本の海洋科学研究の振興とリンクしてきた。さらに、国民や社会の海洋科学への理解増進・普及を促進してきたこと

	もSCORの活動の賜物とも言える。この他、SCORの理念を背景にした提言等を発出することで、例えば海洋基本法（議員立法）の制定、海洋基本計画の策定、内閣府総合海洋政策本部の設置を実現してきたこともSCORの大きな影響の１つと言える。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	SCOR は学際的・分野横断的側面の強い活動を推進してきている。上記にも記したように WG の構成員は常に、地域・世代・性別に関して多様性の高い構成員となるよう配慮しながら活動を行ってきた。最近では、執行部の構成員についてもその配慮が見られ、日本を含むアジア諸国の研究者の議長・副議長（執行部の１、２名は必ず女性研究者）が活躍している。また、先進国に加えて途上国のキャリア初期研究者（多様なキャリアパスの結果、人によってさまざまで年齢によらない呼び方をすることが一般的となっていることから、ここでは若手研究者と同意でキャリア初期研究者と呼ぶ）や女性研究者の育成については、SCOR visiting scholars program を通じて観測活動を支援したり、観測手法をレクチャーしたり、世界中で開催される海洋学の会議への参加費の援助（SCOR travel support）などを実施してきた。これらキャリア初期研究者・女性研究者への支援は SCOR 活動の柱の１つとなっている。科学者の倫理に関する基本方針は ISC の方針に準じている。資金については ISC に加えてユネスコ国際海洋科学コミッションからの資金提供、31 カ国と１地域（台湾）の学術会議を通じた支援を受けて活動をしている。

２　今後の予定について（内規第 11 条　活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）	SCOR 年次総会に関しては 20 年程度の間隔で日本に招致をしてきた。2019 年に富山で開催したばかりであることから、当面の日本開催予定はない。
日本人の役員立候補等の予定について	2018 年から、富山大学の張勁連携会員（日本学術会議第 25 期 SCOR 分科会副委員長）が副議長を務めている。また、原田尚美連携会員（同分科会委員長）が SCOR の今年度の財務内容をチェックするアドホックの役員（監査役のようなイメージ）を務めることになった。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	2021 年度の WG 課題審査が終了し、その結果を SCOR に報告した。

３　国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条　活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の	総会開催状況	2016 年（開催地：ソポト・ポーランド） 2017 年（開催地：ケープタウン・南アフリカ） 2018 年（開催地：プリマス・英国） 2019 年（開催地：富山・日本） 2020 年（開催地：リモート会議）

<table>
<tr><td rowspan="4">状況</td><td></td><td>2021 年（開催地：リモート会議　10 月 25 日開催予定）
＃2016 年までは年次総会（偶数年）と理事会（奇数年）の開催が隔年であったが、2017 年以降は年会に統一され毎年同時開催となっている。</td></tr>
<tr><td>理事会・役員会等開催状況</td><td>2015 年（開催地：ゴア・インド）
2017 年（開催地：ケープタウン・南アフリカ）
2018 年（開催地：プリマス・英国）
2019 年（開催地：富山・日本）
2020 年（開催地：リモート会議）
2021 年（開催地：リモート会議　10 月 25 日開催予定）
＃2016 年までは年次総会（偶数年）と理事会（奇数年）の開催が隔年であったが、2017 年以降は年会に統一され毎年同時開催となっている。</td></tr>
<tr><td>各種委員会開催状況</td><td>2017 年（開催地：パース・オーストラリア他 7 件）
2018 年（開催地：ブレーメンハーフェン・ドイツ他 7 件）
2019 年（開催地：ケープエリザベス・米国他 7 件）
2020 年（開催地：ゴア・インド他 13 件）
2021 年（開催地：リモート 9 件）</td></tr>
<tr><td>研究集会・会議等開催状況</td><td>2017 年（開催地：上海・中国他 8 件）
2018 年（開催地：ポートランド・米国他 20 件）
2019 年（開催地：パリ・フランス他 10 件）
2020 年（開催地：サンディエゴ・米国他 13 件）
2021 年（開催地：リモート 24 件）</td></tr>
<tr><td colspan="2">上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</td><td>SCOR 総会・理事会のみ記す
2015 年　理事会（ゴア）2 名（うち代表派遣：山形俊男）
2016 年　総会（ソポト）2 名（うち代表派遣：山形俊男）
2017 年　総会・理事会（ケープタウン）2 名（うち代表派遣：山形俊男）
2018 年　総会・理事会（プリマス）2 名（うち代表派遣：山形俊男）
2019 年　総会・理事会（富山）9 名（うち代表派遣：山形俊男；LOC 議長：張勁）
2020 年　総会・理事会（リモート）3 名（うち代表派遣：原田尚美）</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去 5 年）</td><td><table><tr><td>役職名</td><td>役職就任期間</td><td>氏名</td><td>会員、連携会員の別</td></tr><tr><td>副議長</td><td>2018～</td><td>張　勁</td><td>（25 期）会員・連携</td></tr><tr><td>SCOR 財務委員会委員</td><td>2022</td><td>原田尚美</td><td>（25 期）会員・連携</td></tr></table></td></tr>
</table>

出版物	１　定期的（年４回）　主な出版物名　SCOR Newsletter （年１回）　主な出版物名　SCOR Proceedings ２　不定期（　　）　主な出版物名 各 WG 報告書、国際大型プロジェクト報告書、学術誌“Biogeosciences”の特集号によるシンポジウムの成果報告書など
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 年次報告書については、本資料に添付して提出している。また、上記に示した不定期の報告書等については以下のサイトで公表されている。 （https://scor-int.org/work/publications/）	

４　国際学術団体に関する基礎的事項（内規第３条、４条、５条）

<table>
<tr><td rowspan="3">国内委員会（内規4条第3号）</td><td>委員会名</td><td>地球惑星科学委員会 SCOR 分科会</td></tr>
<tr><td>委員長名</td><td>原田　尚美</td></tr>
<tr><td>当期の活動状況</td><td>（開催日時　主な審議事項等）
● 第 1 回 SCOR 分科会　2020 年 10 月 16 日 9:00-10:00（遠隔会議）
1. 第 25 期 SCOR 分科会役員の選出について
世話人である山形委員より、原田委員が第 25 期 SCOR 分科会の委員長として推薦され、承認された。原田委員長から、張委員および日比谷委員が副委員長に、沖野委員および川口委員が幹事にそれぞれ指名され、承認された。
2. 第 25 期 SCOR 分科会委員の追加について
原田委員長より、西弘嗣（第三部会員）が第 25 期 SCOR 分科会の委員として追加する案が示され、承認された。
3. 第 25 期特任連携会員の承認について
原田委員長より、青山道夫（筑波大学）、野村大樹（北海道大学）、および升本順夫（東京大学）の三名を特任連携会員の候補者として地球惑星科学委員会に推薦する案が示され、承認された。
4. 第 25 期 SCOR 分科会傘下の小委員会設置について
原田委員長より、第 25 期 SCOR 分科会の下に SIMSEA 小委員会、GEOTRACES 小委員会、および IIOE-2 小委員会を設置する案が提案され、承認された。
また、Global Ocean Science Report 2020 (GOSR2020)の編集状況、「国連海洋科学の 10 年（UN Decade）」の活動状況、その特集号の編集状況について紹介され「国連海洋科学の 10 年」と本分科会との密接な関わりを確認した。海洋科学および海洋政策に関わる諸機関の連携が不可欠であるとの認識が示された。学術研究船「白鳳丸」について、改修および国連海洋科学の 10 年にかかる共同利用航海の公募要領の改訂について報告された。「深海アルゴフロートの全球展開による気候・生態系変動予測の高精度化」が 1 月末にマスタープラン 2020 の重点大型研究計画（合計 31 件）の 1 つとして選出された後、文部科学省ロードマップ 2020 の書面審査を合格し、8 月中旬のヒアリング対象の 17 件の一つとして審査を受けた旨の報告があった。10 月 20-22 日リモート開催の SCOR 年次総会についての日本側の参加状況について確認しあった。

● 第 2 回 SCOR 分科会　2020 年 10 月 22-28 日（メール審議）
議題：学術フォーラム「地球惑星科学の国際学術組織の活動と日本の貢献」の承認について
令和 2 年 10 月 22 日（木）から 28 日（水）まで、学術会議掲示板にて意見交換を行い、それに基づきメール審議を行った。その結果、賛成 12、反対無し、無回答 3 と、回答数の過半数を越える</td></tr>
</table>

		賛成多数をもって分科会として承認した。 ● 第 3 回 SCOR 分科会　2021 年 7 月 26 日（月）13:30-15:30（遠隔会議） 張副委員長の進行で、2021 年度新規 SCOR ワーキンググループ申請書の評価を行った。今回は 5 件の申請があり、各件につき 7~9 人の分科会委員が評価表に記入する形で評価およびコメントを事前に提出した。各委員の総合評価は Must fund・May fund・Not fund のいずれかを選択することになっており、それぞれ 5、3、1 点として平均点を計算したものが委員に示された。まず、5 件すべての申請書について内容と評価指標ごとのコメントを元に、各審査担当者が意見を述べた。次いで、資料を元に全体の審議を行い、うち 2 件を Must fund、3 件を Do no fund と決定した。ただし、Must fund の 1 つについては内容・メンバーともに改善すべき点がまだあるとの判断で、“改善の条件つき Must fund”とした。また、Do not fund とした 3 件の申請書についても、今後より良い提案として再申請されるよう、具体的な改善点に関するコメントを付すこととした。原田委員長と張副委員長とでコメントをまとめ、8 月末の提出期限までに日本 SCOR として、これらの審査結果およびコメントを SCOR 事務局に提出した。 原田委員長から、朝倉書店から出版の打診がある「海洋環境の事典（仮タイトル）」の企画について説明があった。国連海洋科学の 10 年における優先課題 7 件＋1 の 8 章立ての原案、編集母体として日本海洋学会と日本海洋政策学会が中心となる予定が示された。SCOR 分科会として編集協力（編集委員の派遣）を行うかどうかを検討するため、出版の意義、内容や出版形態などについて意見交換を行った。しかし、学術会議の規定により、提言・報告等、決められた方法以外で意見を発出することに該当するため、今回は編集委員会に SCOR 分科会としては参加しないこととなった。また、各 SDGs 達成度についての紹介があり、日本国内においては SDG14（海の豊かさを守ろう）が他の SDG ゴールに比較して最も達成度が低い（2019 年度：53.6%）との報告があった。 ● 傘下の小委員会である「インド洋の学際的な国際調査研究を対象とした IIOE-2」、「沿岸域における学際研究を対象とした SEMSEAS」「GEOTRACES」の活動支援を行った。各小委員会の会議の開催状況は以下の通り。 第 1 回 IIOE-2 小委員会　2021 年 3 月 26 日（遠隔会議） 第 1 回 GEOTRACES 小委員会　2021 年 3 月 23 日（遠隔会議） 第 2 回 GEOTRACES 小委員会　2021 年 4 月 14 日（遠隔会議） 第 1 回 SEMSEA 小委員会　2021 年 3 月 9 日（遠隔会議） その他の活動 • 2021 年 2 月に開催された学術フォーラム「地球惑星科学の国際学術組織の活動と日本の貢献」において、SCOR 分科会が学

<table>
<tr><td></td><td></td><td>際的な海洋科学に関する唯一の学術団体（Scientific Committee on Oceanic Research:SCOR）の国内委員会として活動している旨紹介した。
• 2021 年 5 月 31 日開催の日本地球惑星科学連合のユニオンセッションにて「海洋の仕組みと変動・変化を理解する-Scientific Committee on Oceanic Research: SCOR；海洋研究科学委員会の活動と日本の貢献-」というタイトルで SCOR 分科会の紹介を行い、地球惑星科学の学術コミュニティに当該分科会の活動を紹介した。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">内規第3（国際学術団体の要件関係）</td><td colspan="2">国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である
(1.) 該当する　　2．該当しない
※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載
（https://scor-int.org/scor/about/constitution/）</td></tr>
<tr><td colspan="2">各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）

(1.) 該当する　　2．該当しない

※根拠となる資料の添付又は URL を記載（https://scor-int.org/scor/about/constitution/）</td></tr>
<tr><td colspan="2">下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに〇印）

ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの

(イ) 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの

ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの

エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</td></tr>
<tr><td colspan="2">10 ヵ国を超える各国代表会員が加入している
(1.) 該当する　　2．該当しない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">加入国数及び主要な各国代表会員</td><td>（32 ヶ国と 1 地域（台湾））</td></tr>
<tr><td>・各国代表会員名／国名
Korea Institute of Ocean Science and Technology／韓国
University of Alberta／カナダ
Centre National de la Recherche Scientifique／フランス
Institute Marine Science of National Research Council of Italy ／イタリア
University of Alaska Fairbanks／アメリカ
Universidade Federal da Bahia／ブラジル</td></tr>
</table>

		del Servicio Hidrográfico y Oceanográfico de la Armada／チリ University of Helsinki／フィンランド University of Namibia／ナミビア Moscow State University／ロシア Universidad Nacional Autónoma de México／メキシコ